

## 「偶然」の序説

— 大岡昇平について —

藤原幸雄

「偶然」ということばがある。辞書の意味にしたがつて理解してみても、どうにもならぬものを内在しているようにおもわれる。われわれの日常の生活においても、浅くは驚きをもち深くは神秘的な不思議さをおわせて使つている。そしてそのニアンスはそのときどきの状況と人の心にあわせて展開されているのである。どうにもならない理解のむこうには人間と人生とがまちうけて、深遠な生の秘密が不可解にその一端をのぞかせているのである。

それは、単純に挨拶のようにとりとめもなく交わされるときもあれば、またやがて必然の糸と微妙にからんで複雑に意識されているものもある。しかしそれが生と死にかかるときに、いやがおうでも、偶然の存在を無視しえなくなつてくれるではあるまい。偶然についての哲学的思考をここで重ねようとはおもわない。すでにわれわれは九鬼周造の「偶然性の問題」を読むことができるのだ。

「マルローだつたか、死は人間の生涯を運命とかえる、といつてゐる。人間の一生は生きている間は偶然の積重ねなのであるが、死によつてそれが必然的関係に組替えられる。死んでみて初めてその人の生涯の意味がわかるはずである。」（朝日新聞S 42・6・4）

大岡昇平が「死の予感」について記者からの質問に答えてその心情を軽に語つたことばの断片なのである。この記事には大岡昇平の死生観が平直に語られてるのであるが、戦後の生活を余生と考えながらも死にむかつての心の

用意を感じさせるものがある。心の用意には死の予感のようなものも常につきまとい、それは戦時の体験の私的小説に展開されるものは質を異にするのである。生が完結され、偶然が必然に転化する場合には、主觀が抹殺され、客觀が活かされはするが、抹殺された主觀にとってはその意味するところのものは識ることができないのである。死者にとつては、偶然と必然の圖式は意味をなさなくなる。悲劇はその意味で必然性でつながった客觀的な視点をもたねばならぬものかもしれない。

客觀的な圖式の粹のなかに偶然がくり込まれるにしても、偶然が偶然としてその本質をささやかに意味するにしろ、われわれは人生にあつて、看過することのできないものをもつてゐる。だが現実的には生活の繁忙がそれにとり組む姿勢を曖昧にしがちである。したがつて、偶然はその本質をあきらかにしないまま人間の心のなかをたゆたつてやまないのである。

仮構の世界にあつては、偶然はさまざまな人間関係の生起のうちに、その糸が意識して必然的悲劇の結着にむかつてたぐりよせられる傾向にある。そして偶然は、あるとき必然をとびこえてみずから跳躍する力によつて死への台をふみきることもあるのである。

しかし、死がまちうけ、死が密着している偶然の深さをおもうとき、われわれは、そこで、たじろがざるをえない。偶然はもはや偶然の相をして、人生の本源の姿を現わしてくるからである。おどろき、詠嘆し、涙しても偶然は端然とそこに存在しているのだ。

われわれは偶然の深さを知りながら、その深さのゆえに、もつとも単純に処理しようとする習性をもちすぎているのである。大岡昇平のいう「偶然の系列、つまり永遠に堪えるほど我々の精神は強くない」のかもしれない。

一つの状況がここにある。

「私は音を立てた。話声がとまつた。私は立ち上り、銃で扉を排して、彼等の前に出た。二人は並んで立ち、大きく見開かれた眼が、擲子油の灯を映していた。『バイゲ・コ・ボスボロ（燐寸をくれ）』と私はいつた。女は叫んだ。こういう叫声を日本語は『悲鳴』と概称しているが、あまり正確ではない。それは凡そ『悲』などという人間的感情とは縁のない歎の声であった。人類は立ち上って胸腔を自由に保たないならば、こういう声は出せないのであろう。女の顔は歪み、なおもきれぎれに叫びながら、眼は私の顔から離れなかつた。私の衝動は怒りであった。私は射つた。弾は女の胸にあたつたらしい。空色の薄紗の着物に血斑が急に広がり、女は胸に右手をあて、奇妙な回転をして、前に倒れた。」

(野火)

「野火」の場面である。この小説のなかにあつて、これに統く前後の状況はひとつのかいマックスにあたるところである。作者が作品を語るなかにあり自信のほどを披瀝するとどうじに、苦労した箇所もある。人を殺した主人公の処遇にこまることになつたという。生きた人間を意識的に死にいたらしめることは、たとえ机の上の紙の中の世界であつたとしても、はなはだむつかしいことに語つている。

私は敗残兵として、食糧が残された山間の楽園にあり、死を予期しながら飽満な生活を過していったのである。海をながめることがかれの日課となり、夕方太陽とかれのあいだに位置を占めるとき、海岸の林のうえによく光るものを見たのである。それは十字架であり、孤独な心情のなかにあり、その宗教的象徴の突然の出現に戦慄した

のだった。孤独な人間の心の空虚はこの人間的映像によつてしめられ、夜十字架のことを考え、少年時の思想を反省してみるのである。夢を見る。比島の男女が煽情的なボーズで踊つている。会堂があり、十字架がたしかに金色に輝き、祭壇ではミサがおこなわれ、それは葬式であつた。死者は自分の名前をもつていた。そしてするどい悲しみが心を貫く。「デ・プロフンディス」と唇がつぶやく。断続する音とおそい下弦の月のなかに兵は降路をとるのである。かれは荒された静かな町にはいり、牙をむいて犬の吠えるなかを会堂に到る。すでに、夢は伏線になつていたことがわかる。そして引用した一つの状況が続くことになるのである。

司祭館にあり、苦しいながい眠りからさめると、歌声が聞えてきた。比島の歌で、海にむいた窓から光のようにな若い女の声がはいつてきた。月が出て夜もおそらく、男女の二人が乗つた一隻のパンカーが黒く動いているのであつた。男は艤に女は櫂をもつて漕ぎながら歌つていたのである。男と女は手をとり合つて笑いながら、こちらに駆けてきたのである。そして悲劇がおこつたわけである。女は倒れ、男は喚いて遁走した。

「野火」にあつて、この段階で主人公の私にはすでに狂気の意識が潜在下にあることには注意しなければならぬことである。

私は「運命」が誤つて導いたにせよ、暴兵にすぎないとみずから納得して、神ばかりではない、人とも交わることができない体であることを想い、山に帰ることになった。

この事件についての考察が小説の世界のなかではじまる。

「後悔はなかつた。戦場では殺人は日常茶飯事にすぎない。私が殺人者となつたのは偶然である。私が潜んでいた家へ彼女が男と共に入つて来た、という偶然のため、彼女は死んだのである。何故私は射つたか。女が叫んだからである。しかしこれも私に引金を引かす動機ではあっても、その原因ではなかつた。弾丸が彼女の胸の致命的

な部分に当ったのも、偶然であった。私は殆んどねらわなかつた。これは事故であつた。しかし事故なら何故私はこんなに悲しいのか。」

(野火)

「野火」のみずから招いた悲劇にはこうした思考が加わつてゐる。

むろんこの思考は、作者として当然主人公と共に存する姿勢をとつてゐるにしても、大岡昇平自身のものと考えなければならない。仮構のなかにあり、作家の託する「私」について検討を加えねばならないが、戦争の体験が直接の動機になつて誕まれたこの作品にあって、そのまま直接的に現われているものとみてよい。主人公の呼吸と作者の思考とは同調しているのである。人物の行動とその叙景に仮構はあっても、その思考は登場人物の行動にあわせた偽わらぬことばとみてよい。とくに、大岡昇平の経験と人生にたいする、いや戦争にたいする「私の眼」が現わされているとみて間違ひはないはずである。評家によつてかれの俘虜物に私的という限定が付せられるのも、ここにその理由があるものとおもわれる。

仮構の世界にあつて「私」という視点がある。客觀を装いながらも「私」の視点は明記されてゐる。そして描写の背後に「私」の視点は確固たる位置を拠点としてかためてゐるのである。その解説は分析の結果、作家の全人的なものにやがては吸收されるはずのものであろう。「野火」の主人公田村一等兵の行動を語るにしても、そこには厳然とした大岡昇平の「私」の思考的経験が自然に露出してゐるのである。かれの作品のなかには戦争の体験が石畳のように敷きつめられ、その上を思考が通過しなければならぬことは疑う余地のないところである。

運命といい、神といい、偶然といい、この一連の名詞は悲劇の状況のなかに包括されていふことばである。そして偶然がおかした悲劇のために「私」を背負つた主人公は必然の糸に呼びよせられて山中を彷徨しなければならぬ

破目になつてしまつた。

大岡昇平の作品には「偶然」というのが意識的におもい比重をもつて登場してくる。あるいは小説の世界での行動の思考のなかで、このことばにしばしば出会うのである。かれの生の認識からこのことばは作品の解説にあたつて注目しなければならぬものであり、「偶然の系列」はかれの生の流れの底流をなすものとおもわねばならぬものであろう。偶然が大岡昇平の作家活動の出発にあつたといつても過言ではないはずである。

偶然が重量感をいだくとき、意志をみうしなつた行為の論理性をこの世界にゆだねるとしても、偶然は偶然としてとどまらなくなるのである。偶然の蓄積は悲劇の誕生の導火として意識せずにはおかないものであり、人間の生の根源的なところに思考の力をおよぼすことになるのである。それはしかし、深淵で不可解な迷路に誘いこむことになるだけに、その追究は執拗にくり返えされることになるのだ。だから、偶然ということばは事故とともに存在することにもなつてくる。物理的な単純な事実があるにしても、事故というところに、もはや、人間の力のおよばないものを感じさせるのである。偶然のなかに事故の要素を考えるところに作者の一つの立場がある。過去の戦争体験の経験と二十世紀という時代の様相が現われているものと判断される。そして悲しさとは物理的運動の人間的心情にたいする翻譯からくる人間の本来的なものからものであろう。この「野火」の状況には事実がある。作者自身によつて紹介されている。

ながいが比較の意味で引用する。

「勤務時間の終りに近く、奇妙な事件が起つた。突然海から女の歌声が聞えて來た。歌は比島によくあるスペイントン風の哀調を帶びたメロディで「サ・ビリ・モ」という恋歌である。私は幾度もそれをサンボセの女達が洗濯しながら歌うのを聞いた。黒い筋錐形の物体が、椰子の間に光る水面をのろのろと過ぎた。歌はその物体から発し

てゐるらしかつた。私は事態を全く理解することが出来なかつた。物体は——それが小船であるのをすでに認めていた——左手の家の檻で見えなくなつた。途端歎声は長い悲鳴と變つた。その声を文字で現わすのはむづかしいが、強いて記せば、『おわ、あ、あ、あ、あ、ああ——』とても書こうか。人声というよりも、何か獸の吼えるような声であつた。声はそれで途切れた。一発銃声が鳴り響いた。私は例の紡錘形の物体が、前に通つたコースを逆に、前よりも早くすぎたように思つた。しかしこれはあまり確かではない。この時私は銃声のした方、つまり家の群れている方を見ていたからである。（中略）事実はやはり私の見た通り、歌う比島の女を載せた小船が近づいたのであつた。但し一人の男の同伴者があり、男は砂におりた途端、われわれの一人に製われ捕えられた。女が叫んだのはこの時である。しかし女はまだ船にいたのですぐ潜ぎ出した。発砲したのは機銃班を指揮した補充兵の下士官であつた。弾は当らず、船は遁れ去つた。」

（西矢隊奮戦）

事実と仮構の世界との違いが判然としてくる。「野火」にあつて遁走したのは男であり、屍体となつたのは女であつた。が事実は女が遁走し、男が捕えられた。死んだ人間はだれもいなかつたわけである。女の死は強烈な印象をともなう。孤独な兵がさらに入間界から疎外されることになつた。事実は単なる奇妙な事件として終つた。偶然という不可知な要素がさし入る余地はなかつた。人間の内奥にはいり得ない外的な事件に過ぎなかつた。偶然は「私」とのかわり合いのなかで、その本来の相貌をあらわしはじめることになる。たとえ仮構の世界であつても「野火」にはその底辺に全面的に「私」が投入されているのである。偶然が問題になるところに大岡昇平の人生における貴重な経験が動きはじめるのだ。

そうでなければむしろ比重は必然の方へ重点を移動させるであろう。「偶然」とのながい付合いで存在の意味もあつた。偶然を偶然として鎮めるところにかれの独自性が披露される。しかしそれは独自性を誇つてはいても、や

はり偶然であり、たとえ完結をみても偶然でしかありえないかも知れない。必然的関係のなかにくみ替えることはできないかも知れない。余剰は依然として残る。ただ、それを清算し納得する覚悟がいるのだ。かれの偶然への系列は一つのおなじ端緒からでている。

むしろ戦場での殺人は日常茶飯事であり、あやしい人形にむかって発砲、殺したところで当然であろう。弁明の余地すら残りえない些細事にすぎない。偶然と呼び、事故と解釈するところがひどく人間的であつて、戦場の論理としては、逆に異常とさえおもわれる。ここに生きて帰ることでのきた人間的な側面が掘りおこされるのである。そして、まじめに戦うことのない兵士だった作者の一面がそこに影を鮮明におとしていることに気づくのである。小説にあつてはこの状況下、二つの偶然が仮構のなかで連続して意味づけられている。男と女が入ってきたことの偶然とねらわなかつたにもかかわらず胸という致命的な部分にあたつて死んでしまつた偶然とである。分析すれば二連であつても、事実ならば一続きの行動とその反応とである。死という事実がなければ、本当になんでもないような事件である。二つの偶然の連続が、私をしてやがて孤独がまちうけている山間の彷徨へと帰らせることになるのである。奇妙な事件を仮構で脚色して偶然を発見するところに、大岡昇平にとつての意味があるものと考えるのである。「わが生」を基盤において偶然は意識的にあつかわれ、重い量を与えられることになつてゐる。

途中、自然の循環の相を水の流れにみる。月光を映して流れる小さな川の渦に循環の運動をながめて、こうした繰り返しが自然とおなじように人生のなかにもあるべきだとおもうのである。

そして、

「昨夜からの私の行為は、この循環の中にはなかつた。しかし結果は、比島の女を殺すことで終つた。あれは事故であつたが、しかもし事故が起つたのが、私がその循環からはずれたためだつたとすると、やはり私の責

任である。」

(野火)

秩序と自然の循環を破壊するのが戦いの場ではなかろうか。そこに責任を負うのは単独で彷徨する兵士とはいゝ個の意識の強さを感じさせる。そしてひとりの死が事故であるとするところに、戦場の思考とはいゝ、それが不条理をとく二十世紀の思考につながつてくるのである。事故という事実には偶然のはいりこむ曖昧な領域がのこされているわけであり、自然の循環を破壊することがむしろ時代の様相だといってよい。そしてそれが女の死の「野火」の偶然に集約されているとみてよい。

またその偶然は恋愛小説では装いをあらたにして語られている。

「道子の試みが未遂に終らなかつたのは純然たる事故であつた。事故によらなければ悲劇が起らない。それが二十世紀である。」

(武蔵野夫人)

みずから命を断つにしろ、あやまつて人を殺すにしろ、どちらも偶然を通過して事故に到つてゐる。二十世紀の置かれた特異な状況の表現を深部によみとることができ、もはやどうにもならない人間の一面が語られて奇妙である。意志がありながら、もうすでにその意志が意志として通らない領域に人間がおかれているのが現代であつた。戦場の論理にも、また平和を反映した恋の悲劇にあつても。

そして、不条理といふことばで律しえない深さが人生にあり、不可知な世界への入口が不気味な陰影をもつて横たわつてゐることをわれわれは意識するのである。

「愛について」を読むと偶然の展開には人生的なものよりも、時間の推理小説的な処理で解決されてゆく方法がみられる。これまで自己の経験とあいまつて、複雑さからの未整理な執拗さがあつたが、この小説にあっては偶然は連続してはいても、作者の人生がのしかかる重さは感じられない・仮構の戯れから奇抜を感じうるのである。

「三年前の五月の午後、冴子がその道ばたに車をとめていた私に声をかけたのは、運命というほかはないであろう。一つの偶然が一つの生涯の方向をきめたとしかいいようはない。」

(愛について)

一つの偶然が一人の解遷を結びつけ、その運命がまた一人を離反させる力となり、死と生の世界に分けてしまうのである。大岡昇平の世界にあって、偶然はたしかに意識されてきたものである。かれの数少ない推理小説には單純にしかでてこない偶然というものが、この小説にあっては純然たる仮構のものとして運動する形をとっている、軽々と結合し、身軽に離別するのである。あたかも生の小説的戯れのようだ。

偶然が深刻に問題になつてくるのは、その系列が作家の人生にかかわるときである。それは浮城物、戦記物で展開され、さらに富永太郎、小林秀雄、中原中也などの文学的山系に触れるとき、そしてまた、「幼年」「小年」と過去の不思議にとりつかれてその復元を試みるときである。偶然がおのれの生を支えたその運命を無視しえない「わが生」がそこにあるからである。運命からの偶然の系列にたいする逆探知の作用が認められる。

「一兵卒にとって戦争とは強要された偶然だ。その偶然から始まつたことの必然性を、僕は僕なりに納得せなければ気がすまなかつた。もともと戦史というものは作戦に当つた軍人が書くべきものなのだが、比島のように恥

多き、戦場の記録はどうしてもあと回しになつてしまふ。僕はこれまで弱い兵隊のことばかり書いてきたが、彼らは何も知らされず、ただ戦つて死ぬよりほかになかった。」

（芸生新聞）

偶然の系列にむかつての探索の出発点はあくまでも「私」である。だからその中に、完結しない自己の、完結したもののにむかつての鎮魂の意志をもうかがいみることができる。」

（本学第一回卒業、岡山県立倉敷育陵高校教諭）